

「不遡及」覆し歴史清算に走る国

否定したい、できれば消し去ってしまいたい過去を抱えもつ人間は少なからう。しかし、そういうわけにはいかない。現在は過去の蓄積のうえにしか存在しないのだから。過去とは、つまりは宿命である。国家や民族として同様である。国家や民族の歴史は栄光と汚辱（おとろけ）ももつ紡いで引き継がれる。誇らしい過去ばかりに支えられて現在がある、というほど歴史は単純ではない。栄光の歴史は引き受けるが汚辱の過去は否定してしまおうというのは、ただの傲慢である。

近代法の原則を簡単に放棄
「過去史清算」とか「歴史清算」という表現をたやすく使うのが隣にある。2005年12月、盧武鉉政権下の韓国において「親日反民族行為者財産の国家帰属に関する特別法」が成立した。日本統治時代、その統治に協力した指導者の「反民族行為」の真相を糾明し、それが罪過と認定されれば、子孫の財産を没収して国家の帰属とするための法律である。韓国の政治家の法感覚は一驚に値しよ

う。近代法における法律不遡及の原則（事後法の禁止）は、ここでもはいつも簡単に放棄されている。「罪千歳に及ぶ」という中世の法感覚というべきか。
韓国には「正しい歴史」と「間違った歴史」というものがあって、前者の中に生きていくためには後者を抹消しなければならぬと考えられているようだ。11年8月の「元征軍慰安婦の個人請求権放棄は違憲」とする大法院判決、13年7月に相次いだ新日鉄住金や三菱重工の元徴用工に対する賠償金支払いに関する高等法院判決などの背後にあるのは、同類の法感覚であらう。

事大主義、プラス小中華主義

過去史清算や歴史清算の多くが日本の統治時代を対象としており、中国やロシアとの関係史にそれが向けられることはない。一体、どうしてか。李朝の成立以

正論



拓殖大学総長
渡辺 利夫

朝鮮の小中華主義思想の中枢に位置していたものは、人間社会は儒教の思想と礼式（礼教）により教化され、初めてまっとうすると考える朱子学である。これが原理主義となつて朝鮮社会を染め上げた。礼教に無縁な日本人は文字通りの蛮夷である。礼教を原理とする典雅なる朝鮮王朝を蛮夷の日本が侵略し、あまつさえ朝鮮を日本に「併合」することなど道義において許されるはずがない。道義に違背する過去はそのことごとくを糾弾・否定しなければならない。

韓国の方こそ未来あるのか

よって明が倒され、征服王朝としての清が成立して、朝鮮の中華に對する崇敬の念は鬱屈へと変じた。「蛮夷」満族によって樹立された清には服属し難い。さりとて小国朝鮮にはこの巨大王朝に抗う力はない。そこで表面的には清の臣下として事えながらも、心の深層においては中華の伝統を正しく継承するのは清ではなく、「東方礼儀之國」たる朝鮮のみだとする考え方が次第に強化されていった。前者を事大主義と呼び、後者を小中華主義と称する。

国は中世への逆行を始めたのか。現在の韓国人にはいかにも悔しかろうが、日本の韓国併合は諸列強によって幾重にも承認され、往時の国際法に則つて合法的に実現されたものである。朝鮮の「文明開化」は日本との「合邦」によつて実現するより他に方途なしとする「一進会」に集った人々は、朝鮮統監府の資料によれば14万人、実際には数十万人に及んだといわれ、朝鮮史上最大の政治集団であった。日本統治下にあつて朝鮮の人的・物的・制度的インフラが、王朝時代には信じられない速度で整備され、後の「漢江の奇跡」を呼びます誘因となった。このことについては、韓国の真摯なる研究者の実証研究が少なくない。「歴史を顧みない国家に未来はない」と朴槿恵大統領は言うのだが、この問いかけが何より自国民に對してなされるのでなければ、韓国は今後とも「仮想空間」の中を漂いつづけ、日本との和解も叶うまい。従軍慰安婦問題などという虚構を国事と見違える国家にこそ、未来はないのであらう。

（わたなべ としお）